

文献学とコンピューター

尾 方 一 郎

文献学とは？

このページを開いた君，そうそう君だが，いったい文献学という名前を聞いたことがあるだろうか？ まあたぶんないだろう。「一橋論叢」の「学問への招待」の号に載っているんだから学問の名前だろうというのは想像がつくと思うが，たしかに法学や社会学みたいに学問の名前としてメジャーではない。それに文献って学問に使うものはずなのに，学問の対象にするの，と思うかもしれない。（いや，こういう風に思ってくれば，大学の新生入生としては実はまずまずというところなのだが）。

じっさい，日本の大学には文献学部というのはないし，文献学科も（たぶん）ない。その意味では恐ろしくマイナーな名前だ。しかし，実際に文献学が行われているところは，どこの大学にも（しかも相当な比率で）ある。その意味ではものすごくメジャーな学問でもある。

じゃあどういふ学問なのか。実はこの質問に答えるのがとても難しい。それは書いている僕のアタマが悪いからではなくて（そのせいもあるかもしれないが），この文献学という名前のさす範囲が，やけに広くて漠然としていて，しかも人によって見解が違うからだ。だからもっともらしい説明をするには，A という学者はこう言っていて，B はこう言っているという，いわゆる概念史的に語っていかないと仕方がない。しかしそんな話をしても君の脳ミソに催眠信号を送ってこのページを閉じさせる位の意味しかないだろうから，定義がどうの，というのはたいがいにしておこう。

基本的に文献学というのは、文献（たいていは本だ）を読むときにどうやったからマトモに読めるか、ということを考える学問だ。そう聞くと、本を読むのにそんな学問なんかいるのか、日本語の本は日本語がちゃんと読めればいいし、英語の本は英語がちゃんと読めればいいんじゃないの、と思うかもしれない。それはそうだ。ある意味とても正しい感想なんだが、しかし、日本語がちゃんと読めれば…、というようなときに人が考えていることは、実はたいていの場合ちょっとばかり甘い考えなのだ。

定義の話はあまりしたくないが、それでも触れないわけにいかないのが一つあって、それは19世紀ドイツのアウグスト・ベックという学者が言ったものだ。彼は文献学は「人間の精神によって生み出されたもの、つまり認識されたものの認識」¹⁾ であるという、知ってる人は知っている（当たり前だ）有名な言葉を残した。この考え方からすると、文献学というのは、本に書いてあること（昔いっぺん認識されたこと）を、もういちどその通り認識するのが仕事だ、ということになる。

このところに一つ問題があって、昔認識されたことというのはその本を書いた人間（著者とかが作者とかだ）が考えたことだとすると、本を読んで作者と同じことを考えるのは無理だとか、誤解が生じて当然だとか、さらには誤解するほうが生産的だとか、作者はこういう意図を持っていたなんてことを勝手に言うとか、いろいろ難しい議論があって、それに首を突っ込まなくてはならない羽目になる。

しかしわれわれとしては、もちろん誤解は避けたいが、それにしてもあるレベルまではとにかく書いてあることをキチンと読む努力がまずは必要だと思うので、そういう難しい議論はその後でね、ということにしたい。

本の読み方

じゃあキチンと読むというのはどういうことかということになるが、これを現代日本語の場合で説明するのは少々面倒だ。それは日本で高校までの教育を受けてきた人はたいてい日本語は読めると思っていて、本が分からないのは内容が難

しいからだ、という話になってしまうからだ。日本語を読むにも技術があって、それは高校までの国語の時間では必ずしもしっかりマスターされているわけではない、というのはどうもなかなか納得してもらえない。だからふつうに読むのが大変だと思われる(はずの)英語の本で説明しよう。

大学に入りたての君が英語の本に取り組んだら、まず引っかかるのは単語だろう。例えば compromise という単語が出てきて分からなかったら、辞書をひくだろう。そして「妥協」(名詞)とか「妥協する」(自動詞)という語義が出てきて、それで当てはまりそうなら、行間にメモするなりして先に進む。ごく普通の学生の姿だと思うが(私は辞書なんかめったにひきません、というのはよほどの達人以外はダメ!)これがまず文献学的な努力の基礎中の基礎だ。

あるいは文法的な疑問も出てくるだろう。この文は高校で習ったあの形に当てはまるような気もするが、どうもそれで説明しきれないような気もする…、というようにときには、信用できるしっかりした文法書を持ってきて確かめるだろう。じっさい英語という言語は文法に例外やら特例やら慣用やらが多くて、ちょっと本格的なものを読むといろいろなものにぶつかることになる。そういうときには是非ちゃんと文法も確かめなければならないが、こうして文法書で理解するというのもやはり文献学の基礎だ。(ついでに言うと、私は文法書といえば高校の教科書しか持ってません、という人がいたらそれもちょっと困る。さっそく英語の先生に聞いて、いいのを一冊買おう!)

さらに進んで最新の文献を読んでいると、ふつうの辞書をひいても出ていない単語やその意味、熟語や慣用句に出くわすこともある。そういう場合にはなるべく新しい新語や現代英語の専用の辞書・参考書のお世話になることになる。(ちなみに日本語の場合、新語は「現代用語の基礎知識」や「イミダス」で調べることができるが、新しい〈言い回し〉について調べることはなかなか難しい。これは一つの問題だ)。逆に、17、8世紀あたりの古めの文献、たとえば思想書なんかを読んでいるときに、どうも単語の用法が現在と違うようだというときもあるだろう。そういうときにはそれなりの大きな辞典や、古い時代の専用の辞書を開いてみることになる。

文献学というのは、まず入り口ではこういうことをするのだが、なんだ大したことないじゃん、と思うかも知れない。いや、たしかにこの段階では大したことはない。だが一つ注意しておいて欲しいのは、ここで使ったいろいろな辞書や、文法書というようなものが、それ自体、現在までの（広い意味での）文献学の重要な成果だ、ということだ。江戸時代にオランダ語から『解体新書』を訳した杉田玄白や前野良沢の手元にはちゃんとしたオランダ語の辞書などなかった。そのために大変な苦勞をしたことは玄白の『蘭学事始』にいろいろな逸話とともに描かれていて有名だ。たとえばそういう状態から、今のように世界のめぼしい言語についてはたいてい日本語の辞書が手に入るようになるまでには、多くの学者が大変な思いをしているわけだ。自分で単語集を作ったことがある人なら、そういう苦勞の何百、いや何千分の一の苦勞をしてみたことがあるわけだから、その一端を思いやることができるかもしれない。

ことばの意味

こうしてみると、文献学というのは語学に似ているように見えるだろう。じっさい普通に言われる意味での語学というのは、文献学と強く関わっている。しかし、普通に言う語学というのは、勉強するものであって学問ではない。学問の名前としては英語学や日本語学、ドイツ語学というように、必ずXX語というのがつく。日本史学や西洋史学などという地域限定の学問には、それを総称した歴史学という名前がある。しかしXX語学の総称は語学ではない。言語学がそうかと思われるかもしれないが、これは（少なくとも成り立ちからは）本来別系統の学問だ。じゃあXX語学の方法論を地域限定でなくまとめるとどうなるかという、それが文献学の重要な部分になる。

もともと文献学というのは、すぐには読みこなせない文献、特に古い時代の文献を読むための学問という要素が大きかった。従って近代の文献学の発祥の地ドイツでは、文献学（Philologie）といえ、最初は古典文献学、つまり古代ギリシャ・ラテンの文献を研究する学問だった。これはかれこれ二千年前の文献を読むという話だから、もちろんその頃の言葉が話せる人がいるわけはなし（当た

り前だ), 古代の文献をきっちり読むには, それに必要な知識そのものを古代の文献自体から集めてくるしかないわけだ。

これは日本でも同じことで, たとえば万葉集のある歌を解釈しようとしたら, 万葉時代にはこの単語はこういう意味だったということを知らなくてはならないわけだが, その歌を見て, 使われている単語の意味を推測するという訳にはいかない。こういう一種の循環が起きるのが解釈というもののややこしいところなのだが, たとえばここで無反省に今の日本語の意味から推測してしまうというのはまずい。あるいは昔からの言い伝えが残っている場合もあるが, それも途中で(例えば鎌倉時代の) 解釈が入っている可能性もあるので, 全面的に信頼できるわけではない。

こういう時には, 結局万葉集全体を見て, あるいは同じような時代の古事記などを見て, その単語がどこでどういう使われ方をしているか(用例という)を収集して, それらを並べて比較検討したうえで, その単語のもつ意味(場合によっては複数)を確定していくという作業が必要になる。辞書を見ればいいじゃないかと思うかもしれないが, さっきも言ったとおり, 辞書を作るという仕事には, こういう用例を集めて検討するという作業がその基礎にあるわけだ。しかも辞書の意味は結局は人が考えたものだから, 自分で用例を見直してみると違う意見が出てくるかもしれない。じっさい古文の完了の助動詞「き」と「けり」はどう違うか, というような問題は, 高校では一定の理屈が教えられただろうが, いまだに専門の学者の間でも議論に決着がついているとはいえない。あるいは永遠につかないかもしれない。教えられるのは一応の途中見解だ。したがって辞書だって万能ではない。単語の意味を突き詰めて考えるときには, 用例に戻って議論するのが, 文献学を学問として行う場合の態度なのだ。

本文の決定

こうした語学的な問題のほかにも, もうひとつ文献学の基礎的な部分として重要なのは, そもそも解釈以前に, どういうテキストが正しいのかというのを考えることだ。こう言っても何のことやらという感じかもしれないが, 近代の印刷で広

められたテキストはともかく（それでも結構問題はあるのだが）、それ以前の書物というのは、すべて人が手書きで写して伝えられたものだ。（写本という）。万葉集だって古事記だって、聖書だって論語だって全部人の手写し、ということは、必ず間違いが入る。あるいは写している人間が、中身を改善するつもりで直してしまうこともある。そうすると、同じ万葉集でも二冊の写本が頭から終わりまで全部同じテキストということはない。絶対ないと言ってもいいくらいだ。だとするとどうだろう。元のオリジナルが残っていればそれを信用すればいいのだが、それもまず絶対がない。あるのはそれぞれに違ったテキストを含む複数の写本（運が悪ければ一冊…）だけだ。

万葉集の場合、さらに万葉仮名をどう読むかという問題も入ってくるのでさらに凄まじいことになる。たとえば一番最初にある、雄略天皇の有名な歌でさえ、読み方が一つに決められない。

籠（こ）もよ み籠持ち 掘串（ふくし）もよ み掘串持ち この丘に 菜
摘（なつ）ます子 家告（の）らせ 名告らさね…

という歌だが、最初の方も微妙に読み方の説が分かれるにせよまだたいしたことがない。問題なのはそのあと「家告（の）らせ 名告らさね」という部分で、それ以外に「家聞かな 名告らさね」だという説と、「家聞かな 告らさね」だというのと、少なくともメジャーな説だけでも3つ読みがある。（メジャーでなければ十や二十はある）。またこの歌の終わりも「我こそは 告らめ 家をも名をも」という読み方のほかに「我にこそは 告らめ 家をも名をも」というのもあって、全然違った意味になってしまう。

こういう問題を判断するのに、「歌としてはこっちのほうがいい」という感覚も大事かもしれないが、まずはそれぞれの写本がどのくらい信用がおけるのかとか、語学的な観点からみてどうかとか、極力客観的な根拠によらなくてはならない。

他にも平家物語などは、写本によってある章があったり無かったりとてんでバ

ラバラだし、それほどひどくなくても源氏物語だってまちまちだ。そのなかでどれが一番もとに近いのか、あるいは筋が通るのか、そういうことを考えながら一種類のテキストにまとめていくのが本文批評といわれる仕事だ。教科書に載っていたり、「源氏物語」や「平家物語」などといって現在出版されたりしているのは、どれも学者たちがこういう仕事をして一番妥当と思われる本文を決めた結果に他ならない。したがって、例えば新潮社から出ている「源氏物語」と小学館の「源氏物語」は、本文が違う。違うのが当然なのだ。

同じようなことは当然キリスト教の聖書などにも言える。元の写本(旧約はヘブライ語、新約はギリシャ語)はもちろんそれぞれに違う。しばらく前に、聖書の本文の文字を一定間隔で読んでいくと特別なお告げが現れるという本がベストセラーになったことがある。その解析にはコンピューターを大掛かりに使ったというようなことも華々しく謳われているのだが、そもそも写本による違いがあるなどということはさっぱり考慮に入れられていなかった。何事にも基礎的な知識くらいは欲しいものだ。

そして、印刷の時代の本になっても文献学は活躍する。一度出版された本は、新しく出なおされる(再版される)場合、その第2版には往々にして著者によって改善のために手が加えられて中身が変わっていることがある。カントの『純粹理性批判』などは第2版で余りにも大きく手を入れられたので、第1版とは思想的にも変わったという見方がされたりする位だ。しかし内容的な問題はまあいいでしょう。本というものには、それ以外にいろいろなことが起こる。カントというたぐい稀な知性が書いた本なのに、そのまま読むとどうしてもおかしい、ということがある。そのとき人は疑う。これは誤植なのではないかと。

ミスのいろいろ

誤植というのは、基本的には印刷所でミスがあって、著者が書いた原稿と、印刷されたテキストが違う、ということだ。今は著者がワープロやパソコンで書いて、印刷所に渡すとそのままの文章が出てくるのが普通なので、その意味では誤植というものは稀になった。(たまにワープロで打った文章そのものが間違っ

いるのも「誤植」ということがあるが、これは書いた本人が間違っただけだから実態にあっていない。それを誤植というのは責任のがれみみたいな気もする)。しかしほんの十数年前までは、手書きの原稿を印刷所で活字を組んで印刷するのが普通だったので、じつにいろいろな誤植が発生した。

もちろん印刷所の仕事は人がすることだから、間違いが生ずる。そこで発生した間違いを訂正するのが校正という仕事だ。しかしこれが実にしんきくさい、面倒な仕事なのだ。僕は幸か不幸か活版印刷の歴史がまさに終わらんとするその時期に、ある学会誌の下働きで4年余りこの校正をやることになったので、今となっては貴重な（余り訳には立たないが）経験をいろいろすることができた。

だいたい校正というものは、原稿と印刷所が出してきた見本刷り（ゲラという）が一致しているのを確かめるものなのだから、とうぜん左に原稿、右にゲラを置いて一文ごと、あるいは一フレーズごとに右、左と向いていちいちつき合わせていくものだ。そしてゲラに誤植があれば、赤ペンで修正していく。（朱を入れるという）。しかしこれが面倒くさい。だんだん慣れてくると、つい原稿を長めに読んでゲラを読んでしまう。するとまずいことに、ゲラの方で一応意味が通っていると、原稿から一語脱落していても、気づかずに通り過ぎてしまうというようなことが起こる。しかし実際にはその一語が落ちたために、文の意味が全く変わってしまうということもあるのだ。

もちろんゲラは著者にも回って、そちらでも校正をしてもらう（著者校正という）。しかし、著者は自分で書いたものだから内容を読めば分かると思って原稿とつき合わせたりしない人も多い。するとこれもすり抜けたりする。そしてゲラは印刷所に戻されて朱が入れられたところが訂正される。しかし一度では完全に直らないので普通は3回、初校、再校、三校とやる。（ただし、著者校正はふつう再校までしかない。時間の節約ということもあるが、その他に後で述べる恐ろしい事態を避ける意味もある）。しかし後になればなるほど、文章の意味は通ったような気がするので、小さな間違いは見逃されがちだ。そして三校も終わると校了、めでたく印刷されて、全国に出回る。

が～ん。著者はこの時点ではじめて小さな、しかし致命的な誤植があったこと

を発見する。(文章を書いた人間というものは、人のは読まなくても、自分のは読むものだ)。あとは書いた人のキャラクターにもよるが、時には校正係がたっぷりと油を絞られることになる。これを昔の人は「校正おそるべし」と言った。

だがそれなら原稿と同じになればいいというものでもない。原稿というものには、必ず間違いがある。誤字、脱字、小さな勘違いなどその種類もさまざまだ。そしてどんな立派な先生でも、神様に近い人でない限り、原稿用紙何十枚かの中に間違いがないという人はまずいない。(それを知ったのも、考えてみれば得がたい経験だった)。こういうのを直すのは本来原稿を印刷に回す前の編集の仕事なのだが、実際には編集と校正を同じ人がやることも多いし、たいていは校正でみればいいやということになってしまう。

さてゲラが出てきて、誰が見ても明らかな誤字・脱字のたぐいだったら、原稿とゲラに両方赤字を入れて直してしまうのだが、ヘンな気もするけど微妙だな、ということもある。こういうときには青字で疑問点として書いておいて、著者校正で見てもらうということになるのだが、これもあまりうるさくやると著者のご機嫌を損ねかねない²⁾。したがってほどほどの疑問は、まあいいか、と行って見過ごすことになって、あとでびっくり、ということもある。

また著者校正というのは本人が見てくれるからいいかと思うが、それがなかなかさうでもない。たいていの人は、校正のときに、文章をよりよくしようと思って、原稿との違い以上に直してくるのだ。いまはパソコンで打って、印刷した状態が自分で見られるから事情が変わったが、以前は原稿用紙の手書きと印刷した状態では文章の感じが変わるから、というような理由で、ゲラが真っ赤になる位に直してくるといつわものもいた。(今もいるかもしれない)。しかしこれは混乱のもとである。初校で書き加えられたら、チェックする機会はあると2回しかない。再校で入れられたら、たったの1回だ。著者には原則として三校を見せないというのは、ここにも理由がある。

現在はワープロで原稿を入れるのが主流になったが、それでも校正という習慣が続いているのは、この手直しのためというのが大きい。だがここで一つ申し上

げておく。君たちが将来雑誌などに投稿するときには、完全原稿を入れること、という条件が付けられていることが多いが、これは要するに校正の時に直すな、文章を直すなら最初に入れるまでに完全に直しておけ、という意味だ。そしてもしこの断り書きがなくても、極力入稿までにきっちり仕上げ、校正では最小限の直しで済むようにしたい。

現在では、データで入稿されたのを一括で印刷するのはほぼ自動でできるが、校正の直しは完全に人力で、たとえ量は少なくともはるかに手間がかかる（いいかえれば人件費がかかる）のだ。偉くなって忙しくなったらある程度はしかたない。フランスのプルーストという作家は、ゲラの余白が全部埋まるくらい朱を入れて、それが全部文章の直しだったと、出版者が苦勞を語っている。しかし、若いうちからそういうことをするのはまずい。

僕も編集のときに相当苦勞したので、自分で書くときにはこの原則を守るようにしている。しかし一度だけ破った。締切り前に大変な風邪をひいて、最後の推敲ができなかった。そのために初校で大量の朱を入れることになった。編集や印刷の方々に大きな迷惑をかけたので、こればかりは二度とすまいと思っている。

誤植？

閑話休題それはさておき、たとえばカントの本に誤植かもしれないと思われる箇所があったらどう判断するか、ということだ。今まで余談風に話したように、本を作る過程では、実にいろいろなことが起こる。だから誤植かもしれないし、カントの誤記かもしれない。もしカントが書いた原稿が残っていれば、話は割と簡単だ。原稿と違っていれば誤植だし、原稿もそうなっていれば誤記かもしれない。でも古いものだとたいていは原稿なんか残っていない。だとするとこの手は使えない。

それに誤記や誤植かもしれないということになったにしても、ちょっとした綴りの間違いならともかく、似たような他の単語になっているという場合、本当に間違いなのかどうか、それも分からない。じつは読んでこちらのアタマが悪くて、自分が理解できないものだから、これは単語が違うんじゃないか、と思って

いるだけの可能性もあるのだ。

こういう時には、同じ本のほかの版と比較してみるとというのが常道だ。もし他では別の、意味の通る単語になっていたら、そっちが正しいと判断するのが普通だ。

たとえば『純粹理性批判』を読むなら、出た当時の版をそのまま読むということとはまずないので、現在出ている「哲学文庫」(Philosophische Bibliothek)などの版を使うことになる。そうするとそこには既に、第1版や第2版の誤りと思われる部分は注が付けてあって、正しい(と思われる)テキストになっている。ただ残念なことに、今度は「哲学文庫」自体にも誤植があって、そうすると(気になれば)アカデミー版などの他の版と比較してみるしかない。

僕の遭遇した例では、ドイツの作家トーマス・マンの小説「ファウストゥス博士」を一番信頼され普通に使われる(当時の西ドイツの)フィッシャー社の全集版で読んでるとき、Theologie(神学)という単語が引かなかった³⁾。ここはTheologieじゃどうも話が合わない。そこでフィッシャー社の他の版で見たがやはりTheologieだ。変だなあとと思って、東ドイツの別の出版社の版で見たら、Theorie(理論)とある。これならぴったりくる。たぶんそうだろうということで読み進めた。後日、フィッシャー社から出たこの小説の初版を見たら、やはりTheorieだった。ある時点で誤植が発生し、その誤植のある版をもとに次を作ったので、同じ間違いが次々と伝染したのだろう。だがもし論文に引用する箇所で、こんな誤植があって気づかなかったら一発でアウトだ。

こうしてみると、信頼できるテキストを作るのは大事なことだが、なかなか大変なことだ、というのが分かってもらえると思う。この点は、結局写本で伝わった文献を扱うのとちょっと似たところがある。つまり印刷された本もそれぞれに改訂されたり、間違いを含んでいたりするので、本当に信頼できるテキストを作るためには、誰かが一念発起して、ありとあらゆる版を集めて、それらの違いをチェックして、一番妥当と思われる本文を決めて、その形で出版しなければならぬ。じっさいには著者の原稿が残っていたら、その上の直しの跡をたどることもあるし、印刷された本を著者が持っていたらそれに自分で朱を入れている場合

もあって、それも考慮に入れたりする。

さらに言えば著者の意思をどういう風に反映するかという問題もあって、有名な例では井伏鱒二の『山椒魚』（国語の教科書にもよく載っているから読んだかもしれない）という小説の、大変印象的な結末を、著者自身が晩年になって削除してしまったというのがある。しかしあまりに有名な部分なので、著者の最後の意思だからといって尊重して取ってしまってもいいかどうか、そうとう微妙な問題だ。

こういうようなことをいろいろ考えて作られる版を、ドイツでは歴史批評版という。これを作る人は大変だが、その人が苦勞しておいてくれれば、あとそのテキストを使う人間は安心できるというわけだ。こういう作業は文献学の一番重要な成果の一つで、ドイツでは主な思想家や作家の作品については、かなりの部分こうした歴史批評版が存在する。こういう仕事はお国柄によって得手不得手があるらしく、フランスの作家や思想家の著作についてもドイツ人がやっていたり日本人がやっていたり、ということもある。

版とか翻訳とか

さて、こうしてみると、テキストの中身以前の問題として、同じ本についてどういう版があるか（写本の場合はもっとややこしい）、あるいは同じ著者の作品にはどういふものがあるか、というようなことも知っておかなくてはならなくなる。またある本を理解するためにはどういふ参考書があるかというのも重要な知識だ。

どういふ版があるかというような話は、最近の著者の本だったら、まあそんなに問題にはならない。しかしヨーロッパでも15世紀に始まった印刷術がしっかり形を整える前のもの、日本でいったら江戸時代あたりの木版による印刷の場合には、いつ印刷したのかもはっきり分からなくて、〇〇年という説とXX年という説が対立したりとか、これは本物であれば偽物だとか、その他およそ考えられる限りのいろいろな問題が起こる。（この辺はものすごく大変な分野なのだが、僕もそう詳しくないので簡単にしておく）。

またどういふ参考書があるかという話は、文献学に関わらなくても、およそ学問に携わる人間には必須の知識だ。しかし特に古典など古い文献に関わる研究をする場合には、すでにいろいろな人が注釈を書いているので、全部目を通しておく必要はないが、少なくともその存在は知っておかなくてはならない。また人名や地名などの固有名詞については、それぞれの国、それぞれの時代によってこれを調べればよいという参考資料が大体きまっている。また言葉についても、時代によって、分野によって専門の辞書があったりするので、それも知っておかないと困る。

それからちょっと別のこととしては、翻訳の問題もある。研究対象とするテキストに、他の言語への翻訳があれば、どんな注釈よりも詳細な理解の助けになる。したがってどんな翻訳が存在するかというのも重要な知識だ。

しかし、だからといって例えばフランス思想の研究をするのに日本語訳ばかり読んでいふというわけにはいかない。もちろん参考的な本を勉強のためにサラサラ読むのには邦訳でもいいかもしれないが、研究の対象にしようという場合には、当然原語で読まなくてはならない。というのは、翻訳というものは原書と同じことが書いてあるとは限らないからだ。

もちろん言語が違うのだから、まったく同じということはありません。そういうことに関しては翻訳論という学問分野もあるのだがそれはそれとして、それ以前の問題として翻訳には、どう考えても元の内容と違うことが書いてあるとか、元々は書いてないことが書いてあるとか、逆に削られているとか、原書はなんとか理解可能なのだが訳書は理解不可能とかいうことが、しばしば起こるのだ。

たとえばフロイト（知っていると思うがオーストリア人で精神分析の祖だ）の著作は、とうぜん元々ドイツ語で書かれているのだが、ナチスの時期にロンドンに亡命したということもあって、英訳の立派な著作集があって、これが決定版のような印象さえあたえているし、実際これを使う人も多い。（ドイツ語版の著作集は結構貧相な表紙なので、さらにそういう気がする）。だがある巻をドイツ語とつき合わせてみた経験では、意外に単純なミスが多かった。英語はなまじ構造がドイツ語と似ているだけに、あまり考えずに機械的に訳してしまうことがある

らしい。

日本でもたとえば某文庫に入っているカントの某代表作は、難しいところになると訳で読んでも何がなんだかさっぱり分からない（原書または他の訳なら何とかわかる）というのは有名な話であるし、その他の思想家にも似たような話はいくらでもある。またある本を邦訳で読んでいて、ちょっと面白そうなところがあるのでメモしておこうかなと思って原書を見たら、訳者が大幅に補って訳しているために元はそんなことは書いてなかったということもある。

というわけで翻訳をそのまま鵜呑みにする危険は前に挙げた誤植の問題の比ではない。だから翻訳を参照するにしても、どの訳は定評があって、どの訳はそうでもない、というようなことも知っておかねばならないし、最終的には原書に帰るとというのが文献学の立場からは欠かせない。

コンピューターを使う——辞書

さて今まで見てきたような仕事だが、その多くがコンピューターの発達によってずいぶんと便利になってきた。

まずは辞書だ。君も使っているかもしれないが、電子辞書というのは要するにコンピューターに辞書のデータと単語をひく（検索する）プログラムが最初から入れてあるものだ。コンピューターには人間よりも圧倒的に得意な技がいくつかあるが、大量のデータの中からお目当てのものを検索するというのは得意中の得意だ。

とはいえ、辞書といっても片手で持てるようなものなら、まあ手でひいてもたいしたことはない。しかし専門の辞書というのにはとんでもない量のものもあって、英語の専門家が使う OED (Oxford English Dictionary) という辞書などは、千ページほどもあるものが全20巻、1冊の重さが約3kg、うっかり足の上にも落とそうものなら大変なことになる代物だ。先年本学を退官された T 先生は、英文学者は毎日あれをひいているので自然に腕が丈夫になる。そしてあれがさっと持てないようでは学者の資格がない、と以前おっしゃっていたが、これが CD-ROM では一枚になった。もちろんこれを見るのにはパソコンに専用ソフト

を入れる必要はあるが、その準備さえすれば、いちいち巻ごとにとりかえる必要もなく、さっと希望の項目を開くことができる。

まあそれだけなら腕の力と時間が少々節約できるだけだが、コンピューターを使ってありがたいことは、見出し語だけでなく、その後にある解説や例文の中身までも検索できるということだ。辞書の見出しがABC順に並んでいるのは、そうでないと人間が見つけられないからだが、ということはつまり見出し語のあとには人間のばあい全部見ていかないと必要な情報を見つける手段がないということだ。しかしコンピューターは、どんな場所に埋もれている語でも多少の時間さえかければ必ず見つけ出す。これはとうてい人力ではムリなことだ。

こういう手法は、特に百科事典では効力を発揮する。ふつうの事典では、本文に書いてある情報でも、見出し語になっていなければ探すのはほとんど絶望だ。しかしコンピューターを使えばそうしたものでも探せる。たとえば先に話に出た杉田玄白は字(あざな)を「子鳳」というが、これは「杉田玄白」の項目に出ているだけだ。逆に「子鳳」というのが誰かわからないときにこの字が玄白のものだということを突き止めるのは、この項目がない以上、人力では不可能に近いが、電子的にはなんでもない。

学生諸君が電子辞書を使うのは、ひくのが速い、何冊分も一台に入っているという位の理由が多いのだが、こうしたわけで、もっと本質的に紙の辞書と違うものでもあるのだ。

もっともここで急いで言っておけば、電子辞書には、一度に見える範囲が狭くて、つい単語の解説の最初のほうにある項目しか読まないとか、関連語の方まで視野を広げる機会がないという難点もある。できれば時間の余裕のあるときには、紙の辞書も併用するように心がけると、長い目で見たときには語学力アップにつながるだろう。

用例検索

辞書というのは便利なものだが、しかしどうしても限られた紙面に凝縮された情報を載せるので、もっと詳しい情報を知りたいという場合も出てくる。ここで

はごく簡単な例を考えてみるが、「英語の試験」というのは英語でなんと言うだろうか？

examination と English という単語はすぐに思いつくだろうが、その間をなんという前置詞でつなぐかはちょっと考えるかもしれない。ここで辞書（ジーニアス英和）を引くと、in, on, for が使えて、for の後は通例地位や試験の目的を表す語と書いてある。（この辺がこの辞書の親切なところだ）。大体はこの情報でいいのだが、実際に使われている英語ではどうだろう。

最近はこのようにときにインターネット上の検索エンジンが使える。例えば google というサイトで、「examination * English」という文字列を入れて英語のページを検索してみる。「*」はワイルドカードといって、そこに何が入ってもいい、という意味だ。

すると、Cambridge Advanced Examination in English/The TELC examination in English for Technical Purposes/COMPETITIVE EXAMINATION FOR ENGLISH INTERPRETERS/General Examination in English Composition というような用例が出てくるので、「英語の試験」だったら普通は「in」なんだ、ということがわかる。（3番目の用例は「ジーニアス」の記述どおりの for だ）。また“examination in English”なら7000件近くあるが、“examination on English”は20件余りしかヒットしないので、「on」は余り使われないということもわかる。

では「on」はどういうときに使うか、というのは、むしろ専門家の研究課題になるが、たとえばこういう疑問がわいたとしても、以前は研究者が本や新聞などを読んでいて、見つけた用例をこつこつとカードに取っておくしかなかった。したがって、たとえば辞書を作る人が、用法について細かい記述をしようとしても、「A はいいけど B はダメ」というようなのをすぐに証明するわけにはいかず、ネイティブに聞くか（しかしこれも案外アテにならないこともある。日本語でも「この服はまだ着られる／着れる」はどっちを使うと聞かれたら、結構意見が分かれたりするように、言葉というのは常に揺れているのだから）、膨大な手間をかけて、資料からカードを取るしかなかった。しかし今では、あっというまに何

千という用例がコンピューターによって集められてしまう。

ただし、こうした用例を普通のインターネット上の文章で検索すると、そこで集められる用例は、現代的、時事的なものに強く偏っていることが十分に予想される。そこで専門家が用例収集をするときには、なるべく特殊な偏りをもたないようにさまざまなテキストを集めておいて、その集合（コーパスという）に対して検索をかけるというようなことが行われている。こうした手法は、辞書を作るときにも生かされるようになってきていて、以前はある単語の使い方を記述するときに専門家が自分の言語感覚に頼って「こういう場合には使える／使えない」というような判断をすることも多かったのだが、「実際にこういう場合に使われている／使われない」ということを資料にすることが容易になった。

ただ、言葉というものの常で、実際に使われている形であっても、一般には正式ではないと思われていたりする場合もあり、その辺はまた微妙な判断が入ってくる。たとえばよくある話としては——「全然」とか「絶対に」という副詞は「～ない」という否定形と共にでないと使えず、「全然だいじょうぶ」のような言い方は誤用であって、近年になって広まったものだ……という理解が相当根強くある。（国語辞書にも「俗用」としてあるものがある）。しかし少なくとも近年になってというのは誤解であって、明治の文学作品で「全然」の使い方を検索してみれば、「うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた」（漱石、『坊ちゃん』）、「殿様に全然騙されましたのでごさいます」（紅葉、『金色夜叉』）というような用例が沢山ある。「絶対に」も「医者は絶対に安臥を命じた」（漱石『こころ』）のような例がある……というようなことがすぐに言えるのは、コンピューターのおかげだ⁴⁾。ただし、それを知った上で、自分でどう使うかは、それはまた別問題になる。

それから作家が使った例があるからと言って正しいという証拠にもならない。ある有名作家の小説に「風立ちぬ、いざ生きめやも」というフレーズがある。これはフランスのポール・ヴァレリーの詩句（Le vent se lève, il faut tenter de vivre.）の訳で、どうも「さあ、生きよう」ということが意図されているらしいのだが、万葉集の有名な歌「人妻ゆゑに 我恋ひめやも」などの用例から考える

と、当然「生きようとするだろうか」という反語になってしまう……というこれも有名な話がある。あっさり作家の誤解だと言えればいいのだが、語調のよさをとって確信犯的にこう訳したという説もあるようなので、これまたややこしい。

文献の検索

文献学の仕事は、これ以外にもさまざまな面でコンピューターを使って効率化の恩恵をこうむることができる。前のほうで触れたテキストの決定などもそうした分野だが、あまり一般的な話ではないのでその辺はパスすることにして、おしまいに一番お世話になる機会が多そうな、文献の検索の際のコンピューターの利用の話しよう。

君たちは図書館に行って本を探すのにどういうやり方をするだろうか。

…と言っても、中には大学に入ってからずっと図書館に足を踏み入れず、4年生で卒論を書く段になって、はじめて使い方を聞きにくるというつわものもいるそうだが、そういうのは困る。また図書館に行くのは冷暖房が効いているからとか、静かで気持ちよく寝られるからで、本は借りないというのも困る。またコンピューターの話をしている最中にこうってはなんだが、最近レポートを書くための調べものも全部インターネットで済ませてしまって、本なんか見ないという人もいるようだ。だがインターネット上の情報というのは、時事的なもの商業的なものについては圧倒的な量を誇るが、やはり大いに傾向が偏っていて、本は本でちゃんと調べなければ仕方がない……ということで、ここで言うのは調べものをしたり勉強したりするための本だ。

もちろん、図書館の本は分野ごとに分かれているから、適当に読みたい本がありそうな棚の前に行って探す、というのも一つの手だ。というより、高校まではそういう探し方しかしていなかったという人が多いだろう。だがその辺をもうすこしよく考えてみよう。

われわれが文献を探すという場合、そこにはまったく性格の違う二つの作業が含まれる。

- ア) ある主題に関してどういう文献が存在するかを調べる。
- イ) その文献がどこに所蔵・配架されているかを調べる。

ア) については、だいたい従来(コンピューター化される前の紙の時代)は次のような方法を取っていた。

- a) 文献目録を参照する(単体のもの、他の文献に付随するもの、専門雑誌に掲載されるものなど)
- b) 図書館で、分野別に整理されているカードで検索する
- c) 図書館の書架の該当分野のところで、本を眺める
- d) 専門雑誌の目次を片端から見ていく

a) は、書籍の形のものも、雑誌論文も同様に探せるという点で非常に優れているが、多くは何らかの形で量的に制限を受けていたり、新しいものが入らないという欠点もある。もちろん、年々更新されるような文献目録なら、その点の問題はかなり少なくなるが、その代わりに、時間順に分けられてしまい、一つの主題について調べるときにかなり多くの冊数を縦断的に調べなければならないという別の面倒さも生じてしまう。また、主題別分類が、自分の思っているのと別のところに入れられていたら探しようがない。

b) c) は、当然ながら、その図書館が所蔵している資料しか検索できない。またすぐに見つけられるのは書籍の形のものだけで、雑誌論文はこれでは探すことができない。

d) は、雑誌論文を網羅的に検索する、ほとんど唯一の方法だが、これも手の届く範囲の雑誌に限られるし、非常に大きな労力を要する。

これが、文献目録がコンピューターで作られるようになると、まずデータを一ヶ所に集中することができ、また新しいものが迅速に加えられる。そして、既存の分類、配列に縛られずに検索できるというようなメリットも生じる。

さて我々が利用できる、電子的に検索できる文献目録としては次のようなものがある。

- 1) 各大学・図書館の蔵書目録（日本にはこれらをまとめた国立情報学研究所（NII）の NACSIS Webcat がある）
- 2) 各国の出版目録（日本なら「日本書籍総目録」）のデータベース
- 3) NII や国立国会図書館などの雑誌記事データベース
- 4) 各所に存在する、テーマごとの文献目録

このうちで厳密な意味で文献目録といえるのは、4) だけだ。というのは、文献というものは本来、一冊の本になっていても、ある雑誌のある号の何ページかに載っている短いものでも、そこに書いてある中身として一つは一つだし、文献目録とはそういう観点でみた文献を、あるテーマにしたがって集めたものだからだ。

1) から 3) はその点、物理的な本とか雑誌の記事とかについてのカタログが作ってあるにすぎない。だからこれがもし紙に印刷されたものなら、とうていあるテーマの文献を探すのには役に立たないのだが（五十音順に本のタイトルが何十万も並んでいる中で、例えばイギリス絵画に関する本を探し出すことができるだろうか？）、コンピューターで検索できるということになると、そこには質的な変化が起こり、文献目録の代わりにもなるのだ。（とはいえ、「イギリス絵画」という単語だけで検索してもいくらも見つからない。どういう風に探すかには、またノウハウがある）。

そしていよいよお目当てのテーマの本なり雑誌論文なりが見つかったとしよう。こんどはそれを手に入れる番で、前に書いた、イ) の段階になる。ここで幸運なことに、君たちの前には、国立大学でも有数の規模を誇る一橋の中央図書館がある。まずはそこに行って、探している本や、論文が載っている雑誌の X 巻 X 号を探そう。もちろん検索は館内いたるところにおいてあるコンピューターからできる。このシステムはいかにも一橋らしく HERMES という名前が付けられている。これで無事見つければ、あとはそれを借りたりコピーをとったりすればめで

たしめでたしだ。

ただし、古い本の一部は、コンピューターに入っていないので、カード目録で探さないといけない。これは今となっては前世紀の遺物という感じだが(まさにそうか)、これを検索するには、ちょっとしたコツがいて結構面倒だ。久々にこれをやってみると、コンピューターのありがたみがしみじみと分かる。というのは、カードというのは厳密にアルファベット順(日本語はローマ字配列)になっているので、たとえばある本を探すのに、「著者の名前が分かっている」か、「本の名前(書名)が先頭から分かっている」必要がある。しかも著者のカードはどの図書館にもあるが、書名のカードはあるとは限らない。(例えば東京大学の総合図書館はこれがそろっていなかった)。

しかも一橋の図書館みたいに本が100万冊以上あるということは、カードも100万枚以上あるということで、物理的に目指しているところにたどり着くだけでも結構大変だ。もちろんカードの並べ方は厳密に決まっているから、それを知っていれば割と簡単に見つけられるが、知らない人には(特に何百冊も本がある著者だったりすると)かなりの難題だ。もちろん大変なのは図書館の人も同じで、新しく来た本のカードを順番に従って差し込んでいく作業は、熟練していても1時間に数十枚しかできないと言われていた。(僕も一時期助手という肩書でそういう仕事をしていたが、全体の本の量が百分の一位でも、気合を入れないととりかかれぬ作業だった)。

これがコンピューターになると、がらっと変わる。例えばの話、「著者の名前が、一部でも分かっている」とか「本の名前が、一部でも分かっている」というのでとりあえず検索できる。あるいは本には一定の分類が(図書館の分類とか、日本の標準的な十進分類といわれるものとか)があるから、そうした分類から探してもいい。とにかく、ラクになった。

しかし、お目当ての本や雑誌が一橋にあるとは限らない。こういう時、以前はどうしていたか。雑誌の場合には「学術雑誌総合目録」(学総目)という本があった。これを見るとどこの大学がどの雑誌を、いつからいつまで取っているか分かるようになっていた。しかしこれはとても分厚い本で、しかも欧文編・和文

編それぞれ8冊もある。腕が筋肉痛になる。でも雑誌はまだよかった。本の場合
はもっと悲惨だ。相手の図書館に電話をして問い合わせる、というのは、よほど
偉い先生ならできたかもしれないが、普通はそんなことを調べてはもらえない。
お目当ての図書館にこちらから出向いて、カードをめくるのだ。そしてあれば幸
い、なくてもともと、という世界だった。

僕が助手をしていたところにも、もうとうに退職された本当に偉い先生が、
ちゃんと自ら文献を探しにこられた。他の大学では見つからなかったものだ。
カードはあった。だが本の現物はなかったという。お尋ねがあったので、ぼくも
書庫に降りて確認したが、なかった。大学では時々そういうことが起きる。完全
な空振りになったが、それでもその先生は、淡々と挨拶をしてお帰りになった。
ここでもう一つお願いすると、図書館の本を借りたまま卒業したりしないであら
う。後の人が本当に困る。

それはさておき、今はこうした各大学の蔵書の情報のうちコンピューターに
入っているものはNIIがまとめて管理していて、本でも雑誌でもさっき名を挙げ
た、Nacsis Webcatで簡単に所在が分かる。学総目は全部コンピュータ化され
て本の形では出版されなくなった。もちろん各大学でコンピューター入力してい
ないもの（カードしかないもの）はムリだが、君たちが当面使うものはまず大丈
夫だろう。こうして所蔵している大学が分かったら、一橋の図書館のカウンター
にいて、郵便で借りるなり、コピーをとって送ってもらふなりすることができ
るし、近所の図書館なら直接でかけていってもいい。（必要な場合、一橋で紹介
状をもらっていくのを忘れないように）。

とにかく、コンピューターのおかげで、ここ数十年ほどのあいだに本を探すの
は劇的に簡単になった。しかし残念なことに、この便利さに反比例して、調べも
のに本を使わずにインターネットで済ませてしまう風潮が広がっている気がする。
もう一度言うがいくらインターネットが便利で膨大な情報があるとはいえ、本に
はまた別の、そしていいことが書いてある。おっくがらずに図書館に行って、本
に触れてほしい。それが文献学の基本の基本だ。

- 1) August Boeckh: Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften, hrsg. v. Ernst Bratuscheck, 2. Aufl., Leipzig (B. G. Teubner) 1886. S. 10 [一橋では Yamauchi 159で所蔵]
- 2) これは, 長谷川鑑平, 本と校正, 中公新書 1965年に詳しい.
- 3) Thomas Mann: Doktor Faustus, in: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Frankfurt/M. (S. Fischer) 1974, Bd. 6, S.122, Z.2 v. u.
- 4) 検索は, CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪, 新潮社, 1997年, による.

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)